

4 南薩地域の特性を生かした稼げる野菜産地の育成支援

成果の要約

- 1 ピーマンでは、スマート機器やIPM技術を導入する農家が増加した。また、研修生や新規就農者の定着に向けた支援を実施した。
- 2 根深ねぎでは、ハモグリバエの発生実態が明らかになり、また、防除歴と被害発生状況の調査から、定期的な防除により被害を軽減できることがわかった。
- 3 そらまめでは、種子低温処理不要新品種「はるのそら」について周知を図ったほか、現地実証を行い、生育状況について、着莢開始節位が慣行品種より低いことがわかった。

1 対象

- (1) ピーマン産地の育成
 - ア JA 南さつま加世田ピーマン部会 16 戸
 - イ JA いぶすきえいピーマン専門部 5 戸
- (2) 根深ねぎ産地の育成
 - ア JA 南さつま加世田白ねぎ部会 11 戸
 - イ JA さつま日置白ねぎ部会 42 戸
- (3) まめ類産地の維持、拡大
 - ア JA 南さつま南さつま豆類部会 179 戸
 - イ JA いぶすきえい野菜部会
まめ類専門部 41 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) ピーマン産地の育成
 - ア スマート機器を活用したハウス環境の改善により増収を図る必要がある。
 - イ 難防除病害虫が増加しており、安心安全な農産物を生産するため、IPM 技術の普及を図る必要がある。
 - ウ 新規就農者を確保し、産地拡大を図る必要がある。
- (2) 根深ねぎ産地の育成
 - ア 根深ねぎの栽培者は若い生産者が多く新規就農者も就農し、定着している。
 - イ 収量低下の要因となっているネギハモグリバエ防除対策を確立する。
- (3) まめ類産地の維持、拡大
 - ア まめ類は、産地の高齢化が進み生産者数が減少傾向であるほか、気象災害や病害虫の被害により生産が不安定である。
 - イ そらまめは、催芽後約 1 ヶ月の低温処理を行うが、低温処理中の腐敗が見られるほか、台風被害を受けた場合播き直しが容易ではない。

3 活動の内容及び成果

- (1) ピーマン産地の育成
 - ア スマート機器を活用した技術確立支援
合同研修会（写真 1）等でスマート機器の活用法の理解推進に努めた。その結果、新たに 1 名が導入し、現在 7 名がハウス環境の把握と改善に活用している。
また、土壌水分のモニタリングも 5 戸が活用しており、pF 値に基づくかん水管理に役立てている。



写真 1 合同研修会（7月7日）

- イ IPM 技術の導入
安心安全な農産物生産を図るため天敵を活用した IPM 技術の普及を図った。
その結果、スワルスキーカブリダニやタバコカスミカメなど天敵を活用する農家は全農家の 8 割まで普及してきた。
- ウ 新規就農者の確保・経営確立支援
生産農家・関係機関と連携して新規就農者の確保・育成に努めた。
その結果、次年度 3 名がピーマン経営を開始するとともに、2 名が令和 8 年度に事業を活用してハウスを建設することになった。
また、令和 5 年にハウスを建設した新規就農者に対して栽培技術指導、経営指導を実施した。資金返済が始まるため、長期営

農設計指導を実施し経営確立に向けた支援を行った。

(2) 根深ねぎ産地の育成

ア ネギハモグリバエ発生予察の実施

ネギハモグリバエの発生実態を把握するため、管内8ヶ所で発生予察を実施した。

その結果、金峰地区で3月に成虫が確認されるとともに、5～6月には被害が確認された。

イ ハモグリバエ防除歴と被害発生状況

農家の防除歴を調査し、被害の発生状況と比較した結果、発生時期を捉えて定期的に防除すれば、被害を軽減できることがわかった(図1)。

しかし、防除回数が8回と多く費用もかかったため、低コスト化や防除作業の省力化が課題となった(表1)。

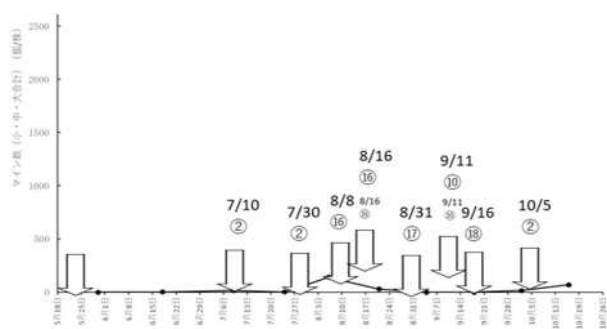


図1 防除歴と発生状況の比較事例

表1 防除回数と農薬費用

散布時期	農薬名	内容量	10a散布量	必要量	単価(円)	金額(円)
7月10日	②アグロシン乳剤	500ml	200L	1本	5,676	5,676
7月30日	②アグロシン乳剤	500ml	200L	1本	5,676	5,676
8月8日	⑩ダブルシューター	500ml	200L	1本	7,788	7,788
8月16日	⑩ダブルシューター	500ml	200L	1本	7,788	7,788
8月31日	⑪ダントツ水溶剤	250g	200L	1袋	4,125	4,125
9月11日	⑩カスケード乳剤	250ml	200L	1本	6,457	6,457
9月16日	⑩プレオフロアブル	500ml	200L	1本	5,566	5,566
10月5日	②アグロシン乳剤	500ml	200L	1本	5,676	5,676
合計 8回			200L			48,752

※農薬は散布に併せて毎回購入した場合の試算。単価は南さつま農協調べ

ウ 効果的な防除方法の提案

農業開発総合センターの試験結果を基に、粒剤や残効性の長い農薬を組み合わせ、20日間隔で定期的に防除するローテーション散布(案)を作成した。

今後は、生産者部会講習会等でローテーション散布の提案を行う計画である。

(3) まめ類産地の維持, 拡大

ア 講習会等による啓発活動

講習会等を通じ、主に催芽や生育初期の高温対策、害虫防除の啓発を行った。また、そらまめの種子低温処理が不要な新品種「はるのそら」について周知を図った。

イ 「はるのそら」現地適応性調査

実証農家4戸にて、「はるのそら」の現地適応性調査を行った(写真2)。

その結果、「はるのそら」は慣行品種(唐比の春及び陵西一寸)より着莢開始節位が低い傾向が見られた(現在収穫調査中)。



写真2 はるのそら生育状況(1月8日)

(4) 今後の課題

(1) ピーマン産地の育成

ア スマート機器の活用技術の向上と普及

イ ホコリダニや斑点病等対策の徹底

ウ 新規就農者の経営確立に向けた継続的な支援

(2) 根深ねぎ産地の育成

ア 生産者部会講習会等におけるローテーション散布の提案

イ 秋取り作型に適した品種導入

(3) まめ類産地の維持, 拡大

ア 収穫調査結果を踏まえた「はるのそら」の評価及び普及推進

イ そらまめ及びえんどう類の生育初期の病害対策啓発

4 担当した普及職員(○はチーフ)

○久富木 上吹越 三角 井出